

南アルプス市

夜叉神峠



南アルプス夜叉神峠

イギリスの冶金技師 W. ガウランドは日本の山岳風景に魅せられ、明治の初期に飛騨山脈を「日本アルプス」と名付けました。それから数年後、同じくイギリスの宣教師 W. ウェストンは外国人として精力的に日本の山々に足跡を残し、彼の最も愛した赤石山脈に「日本南アルプス」と命名しました。

日本を代表する山岳地帯の南アルプスは山梨、長野、静岡の三県にまたがり南北の平面距離約 120 km、東西は中央部で約 40 km の日本最高標高の構造山地です。この山域には、日本第 2 位の高峰である北岳を擁する白峰三山を始め、甲斐駒ヶ岳、鳳凰三山、仙丈ヶ岳、塩見岳、荒川三山、赤石岳、聖岳と標高 3,000 m 級の山々が連なり、アルプス的景観に恵まれ、豊かな多様性に富む高山植物が咲き競う稜線からの眺望は訪れる人々に限りない感動を与えています。また、太古の原生林に覆われた瑞々しい大きな山容の中には見事な渓谷が刻まれ、世界の南限といわれる雷鳥を始め氷河期からの野生動物達が遊ぶ日本山岳の原風景がそこにあります。

このように、人々に限りない恵みを与え、学術的にも貴重な南アルプスは 1964 (昭和 39) 年 6 月 1 日に国立公園に指定され国民的な財産として手厚く保護されています。

夜叉神峠は、南アルプスの山々の前衛として鳳凰三山の南端に位置して、かつては地元の人々の産業を支えていましたが、林業が衰退した今日では、豊かな自然や白峰三山の絶好の展望台、鳳凰三山の登山口として、四季を通じてたくさんの人々をひきつけています。



夜叉神峠からの白峰三山

【夜叉神峠の由来】

大昔のことです。太陽や月は言うに及ばず、山、川、草、木の端々にいたるまで、それぞれの神様が宿っていると信じられていたころのことでありました。

甲斐国の名代の荒れ川「水出川」の源に、猛々しい一柱の神様が棲んでいました。身の丈は七尺余り、両目は日月の如く光り輝やっていたということです。この神は非常に粗暴な振る舞いが多く、悪疫、洪水、暴風雨などを自由に駆使する能力を持っていたので、里人たちは、そうした災害を「夜叉神祟り」と呼んで恐れおののいていました。

今からざっと千年も前の天長 2 年 7 月のことでした。時ならぬ雷鳴のきらめきと沛然たる豪雨をともなった「夜叉神祟り」が甲斐の盆地の野山に襲いかか

ってきました。地軸を裂くばかりの稲光、転地を揺るがす雷鳴、篠つくほどの大雨はまるで滝津瀬のようだった。ということです。

人々は、この物凄い「夜叉神崇り」に生きている空もないほどの恐怖にかられたものであります。そうした「夜叉神崇り」が幾日か続いたある夜のこと、天地も終わりかと思われる大音響と共に八田山（芦倉山）の一部が大きく崩れ落ちて、今の南アルプス市芦安芦倉地区（大曾利部落）のあたりで、水出川をぴったりと堰止めてしまいました。これを見た夜叉神はますます猛り狂って、雲烟を飛ばし雷電を駆使し大雨を降らせたので、一夜のうちに水が満ちて、唐松峠の裾あたりまで一面の湖水になりました。

こうしてできた湖に水が満ち溢れてくると、弱い地盤は見る見るうちに決潰して、津波のような大水は水出川の谷々を鳴りどよめかせながら流れだし、盆地をひとなめにする勢いで釜無川に達し、その堤を壊して更に奔馬の如き勢いをもって、遠く一宮あたりまで押寄せたそうです。そのために甲斐の国中は、まるで、湖だった昔に還るかと思われ、人々の悲しみ嘆く声が天地を覆いつくしました。

ときの国造（くにのみやつこ）であった文屋ノ秋津（ぶんやのあきつ）は、その惨状と人々の悲嘆の状をつぶさに朝廷に奏上したので、淳和天皇はいたく御心を悩まされ、勅使を御差遣になり、水難防除を祈られました。これが今もなお行われている一宮浅間神社の御神幸の起りとなりました。そのために水出川、忘れ川と呼ばれていたこの川は「御勅使川（ミダイガワ）」と呼ばれるようになったのです。

これとは別に、里人たちは「夜叉神崇り」を恐れるあまり、御勅使川をひと目に見下ろせるこの峠に石祠をたてて夜叉神を祀り、神事、祭祀を専らにして仕えたので、荒ぶる神の御心もいつしか解けて、その後、久しくこの地方は、災害に冒されることがなかった。ということです。

現在夜叉神の祠は、夜叉神峠小屋から杖立峠への稜線を20mほど登った右手の草むらの中に安置されて、五穀豊穰の神、縁結びの神となっております。

なお、当時崩れた跡は「瀬戸の滝」と呼ばれ、芦安バス終点から少し登ると右手に大正5年に施工され、登録文化財に指定された、日本初の下段重力式、上段アーチ式コンクリート砂防ダム付近に見られます。

まめ知識 ~その1~

御勅使川扇状地

稀代の荒れ川、御勅使川の氾濫で大量の土砂が下流に運ばれ日本でも最大級の広大な御勅使川扇状地を作り上げました。

信玄の治水事業

古代より御勅使川の氾濫は、流域住民を苦しめ国力も著しく低下しました。そこで甲斐の武将 武田信玄は、将棋頭、十六石等を築き、流れを変えたり、水域を弱めたりして見事にこの川を治めることに成功しました。現在でもこの施設を見ることが出来ます。

【夜叉神峠の道】

耕地の少ない山峡の集落、芦安地区の長い歴史から見ると経済も文化もすべて南アルプスの山々に結びついてきました。古くから生活の糧を山から得る手段として、伐採、木材生産、炭焼、狩猟等の山仕事のために、また安全に作業ができ、たくさんの獲物に恵まれるように、要所には「山の神」を祀りながら山道が出来上がりました。これらの道は生活道路としての機能を持つために、地形をよく読み、最も楽に目的地まで行けるように合理的に造られていて、現在でも大部分の道が登山道として使われています。



生活道から観光道へ 現在の登山道

遙か野呂川の鮎差や広河原が、豊かな森林資源に恵まれていることを知っていた芦安集落の人々は前山の夜叉神峠を登り野呂川に下ったり、また杖立峠や鳳凰山、広河原に向かうために現在の道を作りました。かつてこの道を鋸や斧、時には鉄砲を持った男たち、それに生活物資や出来上がった木製品、炭等を背負った女性たちが額に汗しながら、また近代登山を日本にもたらしたイギリスの宣教師 W・ウェストンもこの道を歩んだのです。

夜叉神峠の樹木

